

「イエシュアの権威」

ルカの福音書 4:31~44

はじめに

今日の箇所はイエシュアが行われた奇蹟、悪霊を追い出し、あらゆる病を癒されたというものです。これらの事実から私たち信者もイエシュアのように、その御名の権威をもって奇蹟を行う者となりましょう、というようなメッセージが広くなされていますが、今日お伝えするのは私たちが、人が、ではなくイエシュアが何を成されるのか、何を成し遂げられるのかというもの、すなわち神のご計画についてです。では早速見てまいりましょう、聖霊の助けがありますように。

1. カペナウムに下る

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:31 それからイエスは、ガリラヤの町カペナウムに下られた。そして安息日には人々を教えておられた。

4:32 人々はその教えに驚いた。そのことばに権威があったからである。

イエシュアは異邦人の地と呼ばれたガリラヤ（イザヤ書 9:1）の、一つの町「カペナウム(קַפְּרְנָחִים)

に下られた」とあります。この町の名には「(神が) 慰め、あわれむ」という意味のナーハム(נָחַם)というヘブル語が込められています。このナーハムの最初の言及は創世記 5:29 の以下の御言葉です。

創世記【新改訳 2017】

5:29 彼はその子をノアと名づけて言った。「この子は、【主】がのろわれたこの地での、私たちの働きと手の労苦から、私たちが慰めてくれるだろう。」

神に従い、巨大な箱舟を造り、家族とともに滅びを免れたノア、彼の存在とその働きを指し示すのがナーハムの本来の意味です。かつてこの地上のすべての生命を滅ぼした大洪水、それが「主がのろわれたこの地での…労苦から、私たちが慰めてくれる」というものでした。神のナーハム、慰め、あわれみとは私たち人が捉えているその概念とは大きくかけ離れており、地球規模の全ての生命をも巻き込む上での「救いと滅び」を指す言葉なのです。イエシュアは「ガリラヤの町カペナウムに下られた」という、一見何の変哲もないこの状況説明は、やがてイエシュアが地上に再臨され、異邦人の中に散らされ、虐げられたイスラエルの民、ユダヤ人とも呼ばれる人々を集めてこれを救い、一方神に従わない、イスラエルに敵対するすべてのものを滅ぼすために、天から「下られ」という壮大な神のご計画を秘めた御言葉なのです。

またイエシュアは「安息日には人々を教えておられた」ともありますが、「教える」という意味のラーマド(לָמַד)は本来、イスラエルの民が生き、神が彼らに与えられる地を彼らが所有する、という神の目的、ご計画を指し示す言葉なのです。

申命記【新改訳 2017】

4:1 イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

また「安息日」とは、神のご計画の完成、完了を指し示す、覚えるためのものです（創世記 2:2~3）。神のご計画の完成、それはイスラエルの民の上に、彼らの地の上に成就する、成し遂げられるものであることを覚えなければなりません。そして聖書の中に、神の御言葉の中に示されたこの事実を認め、信じ受け入れ、その到来、成就を待ち望むことは、私たち異邦人をも救いに至らせませす。しかし逆にこの事実を拒み、否定または無視するならば、それは滅びを招くこととなります。私たちの主イエシュアは、その救いと滅びの御業をどちらも担っておられ、その権限、權威が神から与えられている御方であることを覚えましょう。私たちは天地創造の神を、主イエシュアの御父であられるこの御方を、ただ自分の人生をより良くする、有意義なものにするための道具のような存在として捉えてはなりません。神にはご計画があるのです。そしてそれはイスラエルと、それにつながるもの、また敵対するものに向けられたものなのです。どうか忘れないでください。私たちの神は、聖書を記し、聖書に記された神は、アブラハム、イサク、イスラエルの神と呼ばれ、主イエシュアはそのひとり子であられ、ダビデの子すなわちイスラエルの王なるメシア、ユダヤ人の王と呼ばれることを。そのような御方が有しておられる權威と、それをもって成される御業、成し遂げられる神のご計画がここからの記述には示されていることを覚えてください。

2. 汚れた悪霊

ルカの福音書【新改訳 2017】

4:33 そこの会堂に、汚れた悪霊につかれた人がいた。彼は大声で叫んだ。

4:34 「ああ、ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」

4:35 イエスは彼を叱って、「黙れ。この人から出て行け」と言われた。すると悪霊は、その人を人々の真ん中に投げ倒し、何の害も与えることなくその人から出て行った。

4:36 人々はみな驚いて、互いに言った。「このことばは何なのだろうか。權威と力をもって命じられると、汚れた霊が出て行くとは。」

4:37 こうしてイエスのうわさは、周辺の地域のいたるところに広まっていった。

「汚れた悪霊」と聞くと、私たちは人ならざる存在、悪魔とかサタンとも呼ばれる、神に敵対する靈的存在を思い浮かべてしまいますが、ここに表されているものは、それとは全く異なる存在です。ヘブル語で「汚れる」ことをターメー(אָמַץ)と言いますが、これは本来、イスラエル人の血、血筋、血統と、異邦人のそれが混ざること、イスラエル人と異邦人の混血を意味する言葉です。

創世記【新改訳 2017】

34:3 彼はヤコブの娘ディナに心を奪われ、この若い娘を愛し、彼女に優しく語りかけた。

34:4 シェケムは父のハモルに言った。「この娘を私の妻にしてください。」

34:5 ヤコブは、シェケムが自分の娘ディナを汚したことを聞いた。

ヤコブすなわちイスラエルの娘ディナと、異邦人シェケムが性的関係を持ったという、これが聖書で最初のターメー「汚れる」です。異邦人シェケムはイスラエルの娘を「愛し、彼女に優しく語りかけた」とあり、この後シェケムは一家をあげてイスラエルの家と一つになろうとし、その証である割礼さえも受けるのです。イスラエルを愛し、これにつながり、一つになろうとする異邦人、それがターメーという言葉の持つ本来の意味なのです。

そして「悪霊」のことをシェード(טש)と言いますが、それは本来、文字通りの意味ではなく、イスラエルの神ではない神々、異邦人が信仰する神々を指し示す言葉なのです。

申命記【新改訳 2017】

32:16 彼らは異なる神々で主のねたみを引き起こし、忌み嫌うべきもので、主の怒りを燃えさせた。

32:17 彼らは、神ではない悪霊どもにいけにえを献げた。彼らの知らなかった神々に、近ごろ出て来た新しい神々、先祖が恐れもしなかった神々に。

このように、「悪霊」とは異邦人の神々、それを信じる異邦人の国々を指し示す言葉なのです。つまりここに記された「汚れた悪霊」とは、私たち異邦人の「型」だということです。にわかに信じがたいことですが、ここで彼ら「汚れた悪霊」は何も間違ったことを言うてはいません。彼らはイエシュアを知っていて、そしてその権威を認め、その御言葉に聞き従った存在として描かれているのです。しかも彼らは自分がとりついた人に対して、結果的に何ら危害を及ぼすことはなかった、ヘブル語直訳では「悪を行わなかった」とまであります。にわかに受け入れられないことですが、この「汚れた悪霊」は、イスラエルを愛し、害を加えることなく祝福する異邦人の「型」なのです。

その霊に対し、イエシュアは「黙れ。この人から出て行け」と言われました。その理由は、イエシュアがメシア「キリストであることを、彼らが知っていたからである」とはっきりと記されています。イスラエルの民、ユダヤ人たちにイエシュアこそがメシアであることを知らせる、悟らせるのは、私たち異邦人の教会の働きではなく、終わりの日に「恵みと嘆願の霊」つまり神ご自身の霊がユダヤ人たちに直接降られることによってその事実が目が開かれるのです（ゼカリヤ 12:10）。そしてその時、私たち異邦人の教会は地上にはいません。携挙され、この地上からまさに「出て行っ」てしまっているからです。つまりここでのイエシュアの「この人から出て行け」とは、朽ちる身体を脱ぎ捨て、出て行って、永遠のいのちの身体へと移っていく私たち異邦人の教会の携挙を表しているのです。事実、ここに使われている「出て行く」という意味のヤーツァー(צא)は本来、死や滅びを指し示す言葉ではなく、新しく生まれること、祝福と繁栄の意味を持った言葉なのです。このヤーツァーの最初の言及は以下のものです。

創世記【新改訳 2017】

1:12 地は植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに生じさせた。神はそれを良しと見られた。

このように「出て行け」ヤーツァーは本来、「生じさせ」ること、つまり生かし、種類ごとに区別を持って、神の秩序の中でいのちが繁栄していくことを表した言葉なのです。イエシュアが文字通りの悪霊どもに対してこの言葉を語られるはずがありません。ここに記された「汚れた悪霊」、これは確かにイエシュ

アがメシアであることを知り、信じ、受け入れ、そしてやがてこの地上からヤーツアー、出て行く、携挙される私たち異邦人の教会を表しているのです。さらに言うならば、彼らは「真ん中」から出て行ったともあり、ここに使われるヘブル語ターヴェク(תָּוֶעֶק)は本来、「大空、空中」を意味する言葉なのです(創世記 1:6)。私たちは携挙の際、この「空中」に引き上げられ、イエシュアと会い、そしてそこからともに、ターヴェク「空中」からさらにその上の天へと上って行く、出て行くことがここには表されているのです(Iテサロニケ 4:17)。

このように、イエシュアに「黙れ。この人から出て行け」と言われた「汚れた悪霊」は、ヘブル語のその最初の言及、本来の意味、概念で捉えるならば、イエシュアをメシア、キリストとして信じ受け入れ、地上から空中携挙される私たち異邦人の教会を表しているのです。

2. 熱がひく

4:38 イエスは立ち上がって会堂を出て、シモンの家に入られた。シモンの姑がひどい熱で苦しんでいたため、人々は彼女のことをイエスにお願いした。

4:39 イエスがその枕元に立って熱を叱りつけられると、熱がひいた。彼女はすぐに立ち上がって彼らをもてなし始めた。

先ほどの出来事と同様、イエシュアがその権威を行使される場面です。ここでは「ひどい熱」がその対象です。すると「熱がひいた」とありますがここに使われているラーファー(רָפָא)は本来、「赦す、(死から)解放する」という意味の言葉です。

出エジプト記【新改訳 2017】

4:24 さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。【主】はモーセに会い、彼を殺そうとされた。

4:25 そのとき、ツイポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」

4:26 すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

主はモーセを「殺そうとされ」ますが、「放された」とあり、ここに聖書で最初のラーファーがあります。これはイスラエルの民に対する神のご計画の「型」です。神は彼らの不信、不従順のゆえに滅ぼそうとされますが、御子イエシュアの十字架の血「血の花婿」のゆえに彼らの罪をラーファー「放された」からです。つまりここに描かれている「シモンの姑」とは終わりの日のイスラエル、ユダヤ人たちの「型」だということです。そして彼女はイエシュアを「もてなし始めた」ともありますが、ここに使われているシャーラット(שָׂרָאֵת)は初め、以下の箇所では記されました。

創世記【新改訳 2017】

39:2 【主】がヨセフとともにおられたので、彼は成功する者となり、そのエジプト人の主人の家に住んだ。

39:3 彼の主人は、【主】が彼とともにおられ、【主】が彼のすることすべてを彼に成功させてくださるのを見た。

39:4 それでヨセフは主人の好意を得て、彼のそば近くで仕えることになった。主人は彼にその家を管理させ、自分の全財産を彼に委ねた。

39:5 主人が彼にその家と全財産を管理させたときから、【主】はヨセフのゆえに、このエジプト人の家を祝福された。それで、【主】の祝福が、家や野にある全財産の上にあった。

これはイスラエルの子ヨセフが奴隷として売られた先のエジプトで、主の祝福の基となったという出来事です。ここで「仕える」と訳されているのが聖書で最初のシャーラットです。ですから「シモンの姑」が「もてなし始めた」という出来事には、やがてイエシュアによってイスラエルの民がすべての国々、民族を祝福する、主の祝福を流すその基となる存在となることが「型」として表されているのです。

このように、前述の「汚れた悪霊につかれた人」には、携拳される私たち異邦人の教会の「型」が、そしてこの「熱が引いてもてなし始めたシモンの姑」には回復されたイスラエルの民の「型」がそれぞれ表されているのです。そして次の箇所にもそれと同様の「型」が二度繰り返して表されているのです。

4:40 日が沈むと、様々な病で弱っている者をかかえている人たちがみな、病人たちをみもとに連れて来た。イエスは一人ひとりに手を置いて癒やされた。
4:41 また悪霊どもも、「あなたこそ神の子です」と叫びながら、多くの人から出て行った。イエスは悪霊どもを叱って、ものを言うのをお許しにならなかった。イエスがキリストであることを、彼らが知っていたからである。

このように、上記の箇所にもイエシュアの権威によってシモンの姑のように病が癒される人々と、また汚れた悪霊を追い出される人々の話が記され、教会とイスラエルに対する神のご計画が繰り返されています。しかしここではその記載の順序が逆になっています。それはやはり、神のご計画の完成はイスラエルの民とその地にあるからです。こう記されているとおりです。

マタイの福音書【新改訳 2017】

20:16 このように、後の者が先になり、先の者が後になります。

神の目に私たち異邦人はやはり「後の者」です。しかしそれゆえに携拳によって先に救われます。しかしイスラエルは神にとっての「先の者」であり、その立ち位置、優先順位は決して変わらないのです。神はそのご計画の最後には彼らイスラエルを全人類の「先の者」へと返り咲かせる、回復されるのです。

3. 神の国の福音

4:42 朝になって、イエスは寂しいところに出て行かれた。群衆はイエスを捜し回って、みもとまでやって来た。そして、イエスが自分たちから離れて行かないように、引き止めておこうとした。
4:43 しかしイエスは、彼らにこう言われた。「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから。」
4:44 そしてユダヤの諸会堂で、宣教を続けられた。

ここに「神の国の福音」すなわち神の国におけるイエシュアとその御国の民の姿が表されています。それはつまり、絶えずイエシュアの御顔を慕い求め、イエシュアにどこまでもつき従い、そのみもとを決して離れない民となる、ということがここには「型」として表されているのです。そしてイエシュアもその民を教え導き、彼らとともに住まわれることが表されています。それが、それこそがこの地上の、新しい時代への夜明け、まさに「朝になって」成就される出来事、神のご計画の完成です。

今日の箇所は一見するとイエシュアの権威の偉大さ、強さだけが目に留まる箇所ですが、実際にはイエシュアがその偉大な権威を用いて何を成されるのかという、そのご計画の現れまでもが記されているのです。では最後にこの「権威、権力」という意味のヘブル語シャーラト(טִלְטַל)の最初の言及から、その本来の意味を述べたいと思います。

創世記【新改訳 2017】

42:6 ときに、ヨセフはこの地の**権力者**であり、この地のすべての人に穀物売る者であった。ヨセフの兄弟たちはやって来て、顔を地に付けて彼を伏し拜んだ。

イスラエルの子ヨセフは、エジプトすなわち異邦人の「権力者」シャーラトを持った者となり、それは当時この世界を襲った大飢饉の中で唯一「地のすべての人に穀物売る者」であったと説明されています。つまりこのシャーラトが意味する「権力、権威」とは、地のすべての人を食べさせること、養うこと、生かすことを目的としたものであるということです。そこに「ヨセフの兄弟たち」すなわちイスラエルの子らも集められ、彼を「伏し拜んだ」のです。後にヨセフは兄弟たち、その家族をすべて引き取り、彼らを最良の地に迎え入れ、地の最良のものを食べさせたとあります（創世記 45:18）。このように、「権威、権力」とは異邦人とイスラエル、その両方を集め、養い、その足元にひれ伏させる、従わせること、そしてイスラエルにはその最良のものを与えるというものだということです。イエシュアはその権威と力を持ってその目的を成し遂げられるということです。それが「神の国」です。神のご計画におけるイスラエルと異邦人の区別はこのように極めて明確であり、それがイスラエルの神である主、メシアであられるイエシュアと、その御父の御心だということであり、信者未信者問わず多くの人が天国と呼んでいるその具体的な現れ、その内実だということです。神はこのご計画を完成させるために、今日も働いておられるということをご覚悟ください。

皆さんにもそれぞれ責任があり、目的があり、抱えていることがあるでしょう。しかしそんな皆さんはこのイスラエルの神、主イエシュアに選ばれ、今ここにいます。それは神の目的、ご計画のためであり、それは「神の国」にあります。どうか今の自分の生活、自分の人生の中に埋没しないでください。それは自己中心という罪、神のことを思わず、自分のこと、人のことを思う罪です。イエシュアはそれをサタン「敵」と呼んでおられます（マルコ 8:33）。私たちの神はイスラエルの神であり、御子イエシュアはイスラエルの王メシアだということを覚えてください。そして私たちが生きる場所、永遠に生きる場所はここではない、メシア王国、千年王国とも呼ばれる「神の国」だということを忘れないでください。その永遠の世界に比べれば、今の人生などほんの一瞬です。そんな小さく儂いものにこだわり、捕らわれないでください。ただ「神の国」に目を留め、これを求めましょう。